

小林信郎・梶哲夫編『「現代社会」の単元構成と展開』  
 (明治図書, 昭和58年)

松 本 敏

昭和57年度から、高校では新学習指導要領が実施されている。今回の指導要領の特色の第一は、小・中・高一貫を明確に打ち出したことで、特に高校一年までの10年間の一貫性を強く求めている。その「問いかけ」に応える形で、明治図書から新しいシリーズ「新社会科の単元構成と展開」全十巻が出された。本書はその最終巻にあたる。類書もいくつか出ているが、10年一貫カリキュラムの中の「現代社会」という立場を明確にした点に、本書の独自性を見ることができよう。

本書の構成と執筆者は次のようになっている。

|                         |          |
|-------------------------|----------|
| 序 新社会科10年カリキュラムと「現代社会」  | 小林信郎     |
| Ⅰ 「現代社会」の基本的性格          | 梶 哲夫     |
| Ⅱ 「現代社会」の年間指導計画と単元構成の工夫 | 梶哲夫・高柳英雄 |
| Ⅲ 社会と人間に関する問いかけを深める指導   |          |
| 1 「現代社会」における人間性の確保      | 江口勇治     |
| 2 人類の生存と環境の問題           | 渋沢文隆     |
| 3 資源、エネルギーの有限性と人類の生きる道  | 渋沢文隆     |
| 4 現代の経済社会の特質と追求すべき指標    | 吉田一正     |
| 5 個人と国家の関係、民主政治を確立する道   | 阪上順夫     |
| 6 現代の国際政治の特質と日本の進路      | 三浦軍三     |
| 7 人間生活における文化の意義と現代文化の特質 | 森茂岳雄     |
| 8 青年期と人間としての成長・生き方      | 古山良平     |
| 9 先哲・思想との出会い            | 小林元享     |
| Ⅳ 学習活動の効果を上げる指導の工夫      | 山根栄次     |

Ⅰでは、新教育課程の特色を、小・中・高一貫の構想と学習の指導方法の重視の2点としてとらえ、高校社会科の変遷をあとづけることによって、今回新設された「現代社会」の重要性を強調している。その重要性とはすなわち、「生徒の学習として」、「自らの課題として取り組む」授業の復活を期待されたことの重要性であり、また、10年一貫カリキュラムの最終学年としての

しめくくりと選択諸科目への動機付けとの二重の役割を担っていることの重要性である。その重要な課題に答えられるかどうかの鍵として、新教育課程の定着と充実に努め、生徒と共に自らも学び、教師同士でも学び合い教え合う教師に大きな期待をかけていることは、胆に銘ずべきであろう。

Ⅱでは、年間指導計画の作成の留意点と単元構成の工夫を数例示したあと、具体的な年間指導計画例を二つ掲げている。一つは兵庫の小西正雄氏のもので、興味深い題材を豊富にもりこんでいる。「主題の抽象化」と「教材の具体化」という二極の相即の中に、Fact → Relation → Concept という構造化をねらう意図がよく表われている。ただ、詳細すぎるほどの学習プリントには、生徒の思考を枠にはめてしまうのではないかという危惧を感じる。二つめの例は、高柳氏自身のもので、「現代に生きる倫理」を導入に用い、その後、非行・選挙・経済摩擦・戦争と平和という四つの単元を展開させるものである。いずれの単元も明快な構造図で示されており、しかも生徒からの疑問（あるいは教師からの問題提起）を解きすすむ形で作られている。ともに教科書の枠組を超えた独自の年間指導計画である。教師が、目の前の生徒の立場で有意義な学習をめざす年間指導計画を立てようとするれば、独自なものにならざるを得ないのは考えてみればあたりまえなのだが、多忙と、多忙にかまけた怠慢の故に、多くは教科書に頼りきってしまう。その罪悪を、お二人の努力の成果が改めて知らせてくれた思いがする。

Ⅲでは、「現代社会」で取り扱われる様々なテーマについて、授業展開例を示しつつ、扱い方の視点を述べている。個々に論評する紙数がないが、すべてが生徒のみならず我々自身にとって未解決の、課題性に富んだテーマである。未解決の難問を生徒に提起する時、最も問われねばならないことは教師自身の問いかけの切実さ、学びの深さであろう。生徒はその切実さや深さをキャッチして、自らの問いを深めるのだから。その意味で、Ⅲに含まれる各々の論考は、さまざまな分野における教師自身の学びのきっかけを与えてくれる有意義なものである。

Ⅳでは、新学習指導要領の特色の一つ、学習指導法の工夫について述べている。「現代社会」は学際的、総合的な科目である故に、また受験に遠い1年次の科目である故に、自由な指導をしやすいという。資料等の活用、作業的な学習、授業過程の改善の諸点について多くの提言をしている。

12人もの筆になる編著でありながら、本書に一貫した骨格を与え得たものは、生徒の立場に立って生徒の学習を保障していこうとする熱意であり、その実現を新生「現代社会」の成功に賭ける共通の願いであったろう。（筑波大学大学院博士課程）